

環境教育センター第2回講演会（Mカフェ2）報告

「子どもがいきいきと語り出す授業」

遠藤 晃

仲村 出*

(* 沖縄県座間味村立慶留間小学校教諭)

日時：2011年8月6日(土) 13:30~15:30

場所：南九州大学 都城キャンパス 学生交流会館

磯部 前回は「デンマークの教育に学ぶ」ということで、デンマークの森の幼稚園で働いておられる日本人の加藤幸夫さんにお話をいただきました。その時の大盛況ぶりに味を占めまして、今回は第2回目ということで、舞台は沖縄です。簡単に講師の方々の紹介をさせていただきます。

仲良く並んでおられるお二人ですが、まず左のほうは遠藤晃先生、宮崎県出身です。動物の生態学がご専門で、長年、長崎とか沖縄の離島でシカの研究をされてきました。シカの好きなおところはつぶらな瞳ということをごどこかで書かれていました。この10年ほど、きょうの舞台である慶留間の小学校で、子どもたちと一緒に研究をする中で気づいたことをお話していただく予定です。本学の教員です。

もう一方が仲村出先生、沖縄の慶留間小学校で教員をされています。沖縄県出身でいらっしゃいます。沖縄の北中城小学校、津覇小学校、中の町小学校を経て、昨年度からこの慶留間小学校に勤務されています。現在3、4年生の複式学級の担任をされています。ちなみに複式学級というのをご存じですか。へき地の小学校では人数が少ないということで、学年ごとではなく1、2年、3、4年という複数の学年で学級編成をすることがありますが、その3、4年生の担任をされています。

では早速、遠藤のほうから、「沖縄における自然を活かした環境教育とその意義」ということでお話をさせていただきます。

遠藤 晃／南九州大学

「沖縄における自然を活かした環境教育とその意義」

遠藤 ただいま紹介にあずかりました遠藤です。きょうは天気の悪いなかお集まりいただきましてありがとうございます。

この講演会のタイトルは「子どもがいきいきと語り出す授業」ということで、第一部では私が沖縄の小学校との関わりの中でいろいろなことを考えてきたわけですが、そのお話をさせていただきます。第二部では、仲村出先生がこの小学校での取り組みについて、とくに昨年、本土の大きな学校から赴任されてきて、そこでどういう戸惑いなり、どういう状況だったかをお話をしていただく流れになると思います。それでは早速私の話を始めます。

お話の舞台は沖縄県の離島の小さな小学校、沖縄本島の西40kmぐらいにあります慶留間列島と呼ばれる、行政区で言いますと渡嘉敷村と座間味村という二つの村になりますが、そのうちの座間味村にはシカが棲んでいる島が4つあります。もともと私はシカの生態が専門でありまして、このシカを調べに行ったのが沖縄との最初の関わりになります。

きょうのお話は、仲村先生が勤務されている慶留間小学校、それともう一つの阿嘉小学校が舞台になります。ちょうどいま台風が居座って島は大変なことになっています。仲村先生は3日前から都城に入っていたいて、台風に備えて早めに来ていただきました。

子どもたちがいきいきと語り出すということですが、これはこの6月に沖縄の琉球大学で開

催された沖縄生物学会という、沖縄で生物を研究する研究者がみんな入る学会がありますが、この写真を見てお分かりのように150名ぐらいの生物の研究者を前にして小学校4年生、5年生の子どもたちが発表する。これは昨年に限ったことではなくて、この前の年は阿嘉小学校の子どもたち、その前は慶留間小学校の二つ上の先輩たち、さらにその前は阿嘉小学校、その前は慶留間小学校とほぼ毎年、どちらかの小学校の子どもたちが、自分たちが調べた成果を学会に発表するというのを続けています。ちょっと、その様子をご覧くださいできます。

(学会発表の映像が流れる)

児童1：『さっきやったばかりのような糞が枯葉の上にあります、糞はこの黒いものです。見つけたときはびっくりしました。食べ物がないのにどうして糞が落ちているのか。別の場所でえさを食べて糞をしている。ぼくたちは初めて、シカは時間をかけて食べ物を消化するということが分かりました。まとめ、シカは…』

児童2：『ハイビスカスを顕微鏡で見ると前回見たものとは色が違っていますが、花びらの薄さとちぎれ方などが似ていました。まとめ、糞の中を顕微鏡で見ると、シカはおもに草や葉っぱを食べていることが分かりました。また調べた結果、私たちの考えでは、赤いものはハイビスカスの花ではないかと予想しました。地域の人たちもハイビスカスの花を食べているのを見たことがあると話していたからです。今度調べたいことは、なぜシカの糞の色は黒なのかを調べてみたいです』

いまお見せしたのが今年の6月に子どもたちが発表したものです。本当に150名ぐらいの専門家の前で発表しますし、その後に質問が来るんですね。意外に研究者が気づかない発見を子どもたちがするものだから研究者も真剣に質問してきたりするんですが、それにも子どもたちは答えることができる。こういうシーンを毎回見てきたわけですから。

では話を総合学習、総合的な学習の時間へ。このサブタイトルを「総合学習から学会発表へ」と付けましたが、総合的な学習の時間というのは一体どういうものなのかというと、「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることをねらいとする」。これが総合的な学習の時間。平成14年度からこの時間が作られてきたわけですが、その下に線を引いてあります。「大きな成果を上げている学校がある一方、当初の趣旨、理念が必ずしも十分達成されていない状況も見られるところである」

いまの文科省の、先程学長のほうから「人間力」「生きる力」、そういう言葉がありました、そういうものを育てることが総合的な学習の時間にはすごく求められている。一方でそれがなかなか学校現場ではできていないことも多い。こういうことがあるわけです。

それを学習指導するときはどういうことを注意してやるか。問題解決的な活動、探求的な学習とか、共同的な学習、思考力、判断力、表現力などをはぐくむ言語活動の充実を図る。それから環境学の関連。こういうことを意識して学習指導はやってくださいよということが言われているわけです。私はもともとシカの生態が専門ですが、子どもたちとの関わりの中でいまのようなことがだんだん見えてきた。そういうお話をこれからさせていただきます。また、先程の子どもたちの学会発表の話などを紹介しますと、そここのところをトピック的に扱われて、「すごい！シカ博士をいっぱい育てているね」という話になるんですが、私はシカの研究者を育てるのが目的ではなくて、一つの手段というか手法としてシカ研究というのを使っている。そういうお話をしていきたいと思えます。

ケラマジカの生態研究のために沖縄へ 始まりは沖縄の島です。もう3年か4年ほど前にNHKの「ダーウィンが来た！」という番組で、海を渡るシカの番組があったんですけど、その舞台となったのが慶留間島、阿嘉島。もう少しケラマジカの話をもっと簡単にしますと、シカは日本中に棲んでいて、棲んでいる場所です。いろいろな違いが見られ

る。それは形態的な違いであったり、社会の違いであったり。棲んでいる場所でシカが変わってくるという、そこが興味の根本にあります。

沖縄にはこの慶良間列島にだけシカがいます。じつは沖縄にシカがいることを知らない沖縄の人が、とてもたくさんいるんですね。それはなぜかといいますと、このケラマジカ、もともと沖縄にいた生き物ではないんです。いまでいう移入種ということになるんですが、移入された時期は400年前。ちょうど薩摩が琉球に侵攻していった琉球を支配下に置いていた。その時代背景の中でどうも鹿児島からシカが運ばれているということが、文献的にも分かっていますし、いまDNAを調べますと、どうも鹿児島のある地域にとっても似たDNAの型があるということで、鹿児島から運ばれたということが、ほぼ確定されている。

じゃあ、なぜということなんですが、これは「シカを送った」、「生鹿二十」と書いてあり、「生鹿を20頭送ってくれ」とか「送るよ」というやり取りの文書が残っています。なぜこれを送ったかという、いま考えられているのは、薩摩は琉球を介して直接交易できなかった中国との貿易を始めたわけですね。その利益を薩摩藩財政危機を補うために使っていたと言われてます。その時に琉球は中国の属国になっていたんですね。緩い支配下にあったということ。緩い支配下にあると、必ず中国から定期的に役人が来て、その役人をもてなす。いろんな接待をする。その時の料理のお品書きの中に、ジュゴンであったり、タウナギ、イノシシ。シカというのがあります。このとき琉球にシカはいませんでしたから、おそらく中国のお客さんに出すためにシカを運んだんだらうということが、この文献からも想像されています。

歴史的には非常におもしろい、歴史のあるシカということで天然記念物に指定されています。日本で天然記念物に指定されているシカは、奈良のシカと、このケラマジカの二つだけです。奈良のシカも生き物としては別に珍しいものではないんですが、神様がシカに乗って奈良に降りたという話、文化的な価値があるということで、指定されています。

われわれ生物学の専門にとっては、どうい

ろさがあるかという、もともと鹿児島という温帯に棲んでいたシカが亜熱帯という環境に連れて行かれたときにどう変わるか。そこが生物学的に興味のあることです。よく言われるのは非常に体が黒くなるということ。この写真では背中にカラスがとまっているんですが、カラスと同じくらい体が黒い。そういう傾向が見られます。

小学生の個人的なシカ研究 子どもたちの話に戻します。この座間味村で子どもたちとシカの研究を始めるに至ったきっかけは、一人の少年がシカの研究を始めたことによります。いまこの玉那覇秀也くんという、当時小学校4年生かな。4年生の男の子が、それまでこの島に子どもたちがたくさんいるんですが、シカのことを調べようという子はいなかったんです。この子は、左にいるお母さん、学校の先生ですが、先生として赴任された慶留間島で小学校に通って、そこでシカというものがあるから非常に興味を持って、それを調べたいということで始めた。これがきっかけです。逆にいうと、ずっと島に住んでいる子どもたちにとってシカというのは日常の中にあるものだから、あまり興味を持たないということもいえるかと思います。

当時住まわれていた宿舎の裏に毎日のようにシカが出てくるので、これを数えようということで、これを子どもがカレンダーに一日6頭出てきたとか、多いときには14頭出てきたとか、そういうことを記録していつている。この子の研究の相談にのってくださいということで、教育委員会に言われて関わったのが最初なんです。その時は私もシカの研究者として関わりができるので、とにかくいろんなことを教えてやろうという構えで行くわけです。もっとオスとメスと分けたいとか、時間で分けたいとか、本当にこまごまやっていたわけなんです。ただこの研究はそこからあまり発展はしていかなかったんですね。

これは別の子どもが3年生のときに書いたもの。シカは慶留間島では畑を荒らすので地域では害獣という扱いが強いので、地域の人がどう思っているか、われわれはなかなか怖くて聞けないんですけど、地域の子供たちはそんなことはお構いなしに、おじいさん、おばあさんたち、住ん

でいる方に「ケラマジカ好きか嫌いかなンケート」を、突撃インタビューをして回っている。そうするとこのおばあさんは遠くから「シカは嫌いさー」と、まだ子どもたちが近づく前から答えている。それぐらいシカは嫌われていることが分かった。でも子どもたちが、「じゃあ何で嫌いかな」ということを聞いていくと、「畑を荒らすからだ」と。畑を荒らすけれど、じつは昔は、これがそれを調べたグラフですが、昔は畑にシカはおりてこなかったわけで、「その時は人が山の手入れをしていたよ」という話を子どもたちは聞いてくるわけですね。

だからシカが好きか嫌いかなのインタビューなんだけれど、最終的にはいま日本中で問題になっている里山管理がなされていないために、野生生物が増えている。そういうところに行き着いているわけです。

シカ研究が小学校の総合学習へ 当初はこのように子どもの個人的な研究で関わったんですが、その次に、このケラマジカの保護のためには学校教育の中でケラマジカを扱うことが有効ではないかと思い始めて、そこで教育委員会と話をしました。教育委員会も「それはいいね」という話で、ケラマジカ研究を小学校の中でやらないかという投げかけを学校にさせていただきました。

当時の慶留間の中村校長先生という方がたまたま慶留間出身の先生だったものですから、自分たちが住んでいる地域のことを子どもたちにはぜひ知ってほしいということで、ケラマジカ研究に取り組みました。取り組み方も、3、4年生の2年間はケラマジカ研究をやりますとカリキュラムの中に決めてしまったんですね。ただ、ケラマジカの何を調べるかということは決まっていなかった。とにかくケラマジカに関することを調べなさいということを決めたわけです。それで2002年にそういう話が出て、2003年から本格的に学校教育の中でケラマジカの研究が慶留間小学校では始まりました。

2年間継続してやりますと、すごくまとまった成果が出てきます。ただその時のやり方であるとか苦労とか先生のふるまい方に関しては、この後、仲村先生のほうからお話をいただけたらと思

います。子どもたちが一生懸命やったから発表するというよりは、すごくおもしろい結果が出てくるので、もっといっぱいの人に知ってほしいということから学会発表は始まりました。先程説明したように、隔年で慶留間小と阿嘉小が交代で発表する。中村校長先生と出会ったときにカリキュラムの中に入れてしまったものですから、離島の先生ですからだいたい2年、3年で入れ替わっていくんですけども、先生が入れ替わろうが校長先生が入替わろうが、この体制でずっと続いていくということが、この時できたんです。これを振り返ってみると、このカリキュラムが固定化したということが非常に大きかったというふうに考えています。これも後で仲村先生から詳しいお話があるかと思

3年生で、まずはとにかく島を歩いて、ケラマジカに関する「なぜ」を見つけるということに時間をかけると。長いときは1年かかって、3年生の1年をかけて「なぜ」を発見すると。「なぜ」が決まったら、その中からテーマを決めて、そして研究開始。これをどうやって調べるかも子どもたちで話し合っ

これは昨年ですね。阿嘉小学校の3、4年生が発表した研究成果です。この子たちは、ケラマジカは非常に身近なんですけれど、先程言いましたように畑を荒らす害獣といった意識が非常に強いんですね。それでシカが好きな植物と嫌いな植物についてとっても興味を持ちました。8名いましたから、2つのグループに分かれて、1つのグループはインタビュー班。とにかく島の人に、シカが食べる植物、食べない植物を聞いて回って、いろんな植物が食べられていることを調べてきました。

もう1つのグループは、じゃあシカが食べるのか食べないのかを何で決まるんだろうということ

ごく好きなんです。このシカが大好きな葉っぱに、マスタードとか酢とか辛子とか蜂蜜とかチョコレートとか、ありとあらゆるものを塗って、食べるか食べないかという実験をするんですね。実験した結果は、何を塗っても全部食べるという結果だった。何となくこの実験は失敗したで終わってしまったんです。しまったというか、しまっていたんですね。

ところがインタビュー班は非常に大事な発見をしていて、いろんなものが食べられるんだけど、マリーゴールドだけは食べられてなかったということを知っているんですね。そこで、どうも見ていると、実験したグループの子どもたちが何か言いたくてしょうがなさそうな顔をしているので、この2つのグループを合体して何かやってみようかという話を振ってみたんです。

そうするとうずうずしていた子がすぐに、クワの葉っぱにマリーゴールドの味を付けたらどうなるかという発想で、これをやってみたいと言い出すんですね。それからいろんな発想が出てくる。今度はマリーゴールドに大好きなクワの味を付けたら食べるのか、とか。そんなことが子どもたちからどんどん出てくるんですね。じゃあマリーゴールドで実験してみようじゃないかということで、学校の花壇に走って行って摘んできて、どうやって味を付けようかと。ちょうどその時の校長先生が化学の先生で、「これはアルコールで抽出したらいいよ」という話で。校長先生にすごく出番があった。なかなか普段は校長室から出てこないんですが、こういう形で子どもたちから、「校長先生、すごい」と言われるものだから、校長先生もだんだんその気になって、いろんなことを教えてくださった。ほんとに何人いるか分からないぐらい手が伸びてきて、とにかくやりたい、やりたいということで、マリーゴールドの抽出をした。子どもたちはマリーゴールドの香水と言っていましたが、この香水を作った。クワの葉にこの香水をかけたらどうなるかという実験をするんですね。ほかにラー油とかいろんなものを掛けてみるんですけど。そのときの映像です。

(NHKの映像資料を見ながら)

ナレーション：『島の人々を悩ませるケラマジカをもっとよく知ろうと、いま島の子どもたちが様々な調査を行っています。今回行ったのは好き嫌いを調べる実験です。専門家が見守る中で子どもたちのアイデアから生まれたユニークな実験です。ケラマジカの好きなクワの葉に液状のトウガラシやラー油などを吹き付けて食べるかどうかを調べます。これまでもレモンやわさびなど様々な食品で実験してきましたが、すべて跡形もなく食べられてしまいました。シカが食べたという証拠を撮影するため無人カメラも設置しました。その夜、シカの姿がはっきりと映っていました。翌朝、子どもたちが結果を見に行きました。葉は引き抜かれただけでほとんど食べられていませんでした』

知りたくて話したくて、うずうず、いまお見せしたような実験をして、翌朝、子どもたちは見たくてしょうがないから走っていくんですが、じつは朝、学校に行きますと掃除の時間で、子どもたちは掃除に一生懸命になって。掃除が終わると次の授業が始まるということで時間が無いので、結果は、近くの子が代表してカメラを持ってくるということになっていて、結局自分たちがやった実験を最後まで見れないという状態だったのです。校長先生にお願いして、これを見せに行かせることはできないかと言ったら、映像にあるように、子どもたちはすっ飛んで行って結果を一生懸命見ている、ということになったんです。

それから学会発表の話ももう一つあるんですが、やはり学会での発表ということで、先生たちも子どもたちをトレーニングするんですね。ポスターで発表するんですが、そのポスターの文字を一言も間違えないように。文章自体もほとんど先生たちが作ってしまっていたんです。その文章を子どもたちは一生懸命覚えようとするんだけど、どうしても覚えきれなくて間違えてしまう。間違えて詰まってしまうと、「もう、俺はだめだ」みたいなことを言い出すんですね、子どもたちが。言葉なんか間違ったら変えてもいいというようなことを言うと、その一言で、子どもたちは自信に満ちた発表ができました。自分たちで思いついた

実験なので、自分たちの中に内容があるはずなんだけど、最終的に発表する段階で、ポスターに書かれている文字を間違いなく読むということが目標になってしまって、自分の中にあるものが逆に出てこなくなってしまう。そういうことが、実際に起こったという話です。

小さな学校から教育を考える いまの慶留間小学校の話なんですけれど、2年から3年で先生方は転任されていきますが、沖縄の本島に戻った先生ですね。慶留間で子どもたちとシカ研究をした先生が、戻った学校で同じようなことができないかと。沖縄本島ですからシカはいないんですが、学校にチョウチョが飛んでくるけど、これを使って何かできないかねという相談をされてきたんですね。これも別に意図したことではないんですが、そうやって考えると、どうもこの先生は慶留間小学校で子どもたちの指導をする中で、身のまわりにある自然を使った教育をやってみようという意識が芽生えたんじゃないかと思うんです。これがその授業なんですけど、本当に校庭にある葉っぱを採ってきて形を作るところで、いろいろな掛付けをして、やった授業です。

そんなふうに考えますと、いまこの離島なんですけど、虎の穴って、昔のタイガーマスク世代は分かると思うんですが、トレーニングの場とイメージしていただければと思います。

離島を2年、3年で回ってきた先生方、この離島の小学校に来たときにこういう環境教育をただ文章とか本とか研修とかで学ぶのではなくて、本当に実地で子どもたちと関わりを持ちながら学んでいく。そうやって経験をした先生方がまた本島に戻ったときに、新しい学校で、もちろん規模は大きくなりますが、そこでまた同じようなテイストを持った、もちろん同じことはできないんですが、同じ意識を持って子どもたちの教育に当たることができるんじゃないかと考えます。

宮崎でも始まった取り組み そうしますと、じつは宮崎も山間部の小さな学校が多いんですが、小さな学校というのは子どもの数は少ない、自然が豊か、地域のつながりが強い。逆に考えますとこういう環境教育を子どもたちがやるということだけでなく、先生方がこの環境教育を教えるト

レーニングをする場として再認識することができるんじゃないか。だからこういう小さな学校は経済効率からいくと悪いということだんだん続廃合ということになるわけなんですけれど、逆に考えるとすごく理想的な教育ができる場として位置付けられるんじゃないか。

このことは、私が2年前ここに赴任してきて、きょう来られている、勝手にお名前を出して申し訳ないですが、丸野小学校の坂元校長先生。昨年まで御池小学校にいらした先生との出会いというのがありました。御池の小学校、宮崎の方はご存じだと思いますが、本当に森の木立の中にとっても夢のある小学校がある。これが御池小学校。私も宮崎の人間ですから、すごくこの御池小学校のことが気になっていて、本当にたまたまなんですけれど、この御池小学校を訪問したときに坂元先生との出会いがありました。それで慶留間小の話をしましたら、すごく興味を示していただいたと同時に、御池小学校も同じような位置付けができるんじゃないかと。つまりいま御池小学校の先生方が子どもたちの環境教育に携わるということ。そういう場として位置付けることができるんじゃないか。もちろん子どもたちもすごく丁寧な教育を受けられる。そういう場としてへき地の小さな学校というのは意味がある。それは沖縄の慶留間小学校のことを坂元先生はおっしゃったんですけど、そういう言葉をいただいて、ああそうかと、私も思ったんです。

いまは岡村校長先生に代わられたんですが、今年度から3、4、5、6年生の総合学習で御池小の周りのシカの研究が始まりました。新燃岳が噴火したあとで、森の中にも火山灰が10cmくらいたまっていて、噴石が飛んでくるかもしれないというのでマスクとヘルメットで森の中を歩いて、シカの観察をやりました。本当に食べ物もないところなんですけれど、こういうところで鹿の糞であるとか足跡であるとか、皮をはいだ跡だとか、そういう痕跡をずっと見て歩いているところです。

じゃあ、シカがいないとこんなことはできないかということ、じつはこれも勝手にすみません、写真を出していますが。坂元先生が丸野小学校に移

られて、丸野小学校は畑、田んぼの中にあるような学校で、もちろんシカとかいないんですけど、そこで身近な自然を使ってできることはないか。ちょっと規模も大きくなりますけど、そこでもできることはないかということで、この一学期です、4年生の総合学習で丸野の自然探検ということで取り組みをやりました。

これもただ調べるだけではなくて、例えばヒメジオンとかハルジオンとかあるんだけど、図鑑で調べると、このヒメジオン、ハルジオンは草丈が30cmから1mくらいと書いてある。本当に丸野のヒメジオンはそうなのと聞いたら、じゃあ測ってみようかという話になって。それで測ってみると、一番高いのは197cmあった。そういうことを子どもたちは見つけるわけです。必ずしも図鑑に書かれているとおりはしないということも知っていく。

子どもたちはとってもきれいな植物、学長がいま首を前に伸ばしましたけれど、コケが専門の学長は分かるんじゃないかと思いますが。写真が少し悪いですが、クラマゴケ、コンテリクラマゴケという、この名前が分からなかったんです。とっても青色で光ってきれいな植物で、子どもたちが興味を持って、持って帰ってきていて、一生懸命図鑑で探すけど名前が分からなくて、もう自分たちで名前を付けようと話をしていた。ある子がエメラルドとか、あるいはサファイヤとか。なぜか男の子がバンドウエイジと言ったものですから、じゃあどれにしようかと話しても決まらないので、これはエメラルド・サファイヤ・バンドウエイジにしておこうということで。本当の名前が分からなかったらそれでいこうと話していたら、すぐに見つけてコンテリクラマゴケと分かった。コンテリというのは聞きなれないんですが、紺色に照る、輝くですから、エメラルドとかサファイヤとかそういうことをイメージする。バンドウエイジはわからないですが、最初に名前を付ける人もそういうイメージで名前を付けている。その時に何をやっているかと思ったら、植物の特徴を見ているわけですね。それで名前を付けているということを子どもたちは学びました。

この写真は、用水路で一人の子が手を突っ込ん

だら、みんなが並んで手を突っ込み始めて、水の流れの速さであるとか、そこにいる生き物だとか、そういうことに興味を持ちました。この写真は、鳥のことを調べていたグループが、ツバメは1日に200回、えさを運んでくるということを文献で調べてきて、これも丸野のツバメはそんなに働いているのかと聞いたら、じゃあ調べてみる。学校にツバメの巣があるから、この休み時間はぼくがやるから次の休み時間はあなたねと役割分担をして調査研究を始めているわけです。自分の家に鳥の巣がある子は休みの日に、朝から夕方まで見て、70回から80回運んでくるというのを数えている。それを持ち寄って、最後に発表しなくちゃいけないんだけど、どうやってまとめようかと言ったら、子どもたちすぐに、グラフにするとするわけですね。算数が理科で習ったグラフを使いたくてしょうがないんだと思うんですけど。最後におもしろいのは、日によって観察した時間は違うんですけど、1時間当たりになおすと大体5回という数字が出てきて。それは子どもたち一生懸命割り算をして、そこで算数の要素というのも入ってくるわけですね。

こちらの子はヒメジオンを測った。ヒメジオンを50本、60本と測ったんですけど、これも平均を出すということで、全部足して割ってということをやった。平均というのはまだ習っていなかったんですが、そういう計算ができたということに喜んでいる子どもがいる。算数の楽しさとかそういうことを、子どもたちは感じているんじゃないかと思います。

各グループが発表した後に質問の時間をつくると、同じ経験をしているので、いろんな質問があるんですね。活発にやり取りもできていました。自然を活かして育むもの これまで沖縄の話と宮崎の話の駆け足でみてきましたけど、子どもたちの「人間力」だとか「生きる力」とか、「主体性」とか、こういうものを育てるために、いまの話の少し整理してみると、まずは子どもたちに関心なものを見せるということ。そこでいろんなことを見て発見しているの、これを出す場をつくっていく。いろんなとんでもない話も出てくるんですけど、まずはこれを受け入れてみよう。

もしおかしければそれを「おかしいだろう」ではなくて、「じゃあどうなの」と問いかけて逆に質問する。すると子どもたちは一生懸命答えようとして、もしおかしなこと、矛盾点があれば、そこで子どもたちが気づく。こういうことを、どうもやってきたんだなと感じるわけです。

今日ご紹介した話は、最初にこうしようと思ってやったというよりも、いろんな流れの中で、結果的にこういうことが起こっていて、それが子どもたちの学会発表にまでつながるような話になっているんだというふうに感じています。

最後になりますが、いろんな教育のモデルとして、例えば北欧に視察に行こう！とそんな話があるわけなんですけど、意外に日本にもそういう教育の理想というものはあるんじゃないかというふうに言うことができる。スライドには慶留間に行こうということが書いてありますけど、御池に行こう、丸野に行こうということもできるんじゃないかと考えています。

磯部 では、第二部に入りたいと思います。「子どもがいきいきと語りだす授業」慶留間小の取り組みということで、仲村出先生にご報告をいただきたいと思います。

仲村 出／座間味村立慶留間小学校 「子どもがいきいきと語りだす授業」

仲村 よろしくお願ひします。座って話をさせてください。きょうは遠方からわざわざありがとうございます。一番遠いのはぼくかなと思いますけど。いま沖縄は台風が来ていて、慶留間小にさっき電話してみたら、体育館に雨漏りがしてみんなあたふたしているそうです。猫の手も借りたいと言っていましたので、「がんばってくださいーい」とエールを送りました。土曜の午後、お茶でも飲みながらということだったので、多分今頃から眠くなるんじゃないかなと思いますけど、どうぞ気軽に聞いてください。ちょっとぼくのほうもこんなに急いで来るとは思わなかったの、資料のほうも遊びというか悪ふざけも入っていると思いますけど、少しでも参考になればと思っています。

す。

慶留間小学校と子どもたち 慶留間小学校ですね。子どもがいきいきと語りだす授業ということですが。まず1年生は2人、2年生は1人、3年生が3人、4年生はいません。5年生は1人、6年生2人の計9名の小学校です。きょう多分ここにいらっしゃる皆さんで慶留間島の人口を超えています。慶留間島は50名しか、60名を切って、50名しか住んでいません。

子どもたちから紹介させてください。昨年度私が担当した児童です。いつも探検する森の入り口で撮ったものなんですけど、「写真撮るよー」と言ったら、ちょっと変身したいということで、後ろのうちから走ってこの格好で来ました。女の子はケラマジカで、男の子はなぜか地デジカ。アナログ放送終了まで4カ月ですね。ちなみに頭はトナカイなんですけど、シカと言っています。このような子どもたちを担当していました。去年の3年生の船附知将くん。4年生です。女の子が、糸嶺春華さん。5年生です。この写真を見ただけでも、いきいきと語りだそうとしているのが分かります。思いますけど、いきいきというか、がつがつしゃべる子たちです。

これは総合の調べ学習の様子です。森に入る前に、シカ探検に双眼鏡を持って、野鳥も一緒に観察しようということで、実際にサギを調べていますね。特徴をとらえて野鳥図鑑でサギを調べているところです。自分たちで調べることが身につけていました。

そして、糞の匂いをかいでいるところです。2人とも平気で触ることができます。ぼくはあんまり触りたくないんですけど。普通は乾燥したもののしかさわらないんですけど、この子たちはやったばかりのヌメヌメとしたものを触っている。この匂いを平気でかいでいるたくましい子たちです。糞を集めているところです。この子達は糞を調べたんですが、実際、無意識で糞を取りながらポケットに入れたりして、おうちに帰って洗濯したお母さんにとっても怒られたそうです。

2人で糞の中を調べているところです。とてもいいコンビですね。本当に息の合った仲良し2人組でした。

これは本年度の3年生です。左から中村和寛くん、そして真ん中が渡口怜くん、右が大村加奈子さんです。写真は沖縄最大のショッピングセンター、サンエーというところ。島の子たちはこのサンエーが憧れの場所で、たまに家族で行ったりして島に戻ってきたら、「サンエーに行ってきたよ」と声を弾ませて報告してくれます。

調べ学習ですね。角のとき跡を発見しました。大体同じ木にとき跡があって、いろんな場所に発見することができます。その木の葉っぱを調べているところですね。

次も調べ学習の写真ですね。こういうふうに総合の調べ学習をしているので、理科の調べ学習でも、積極的にアオムシの観察とか行っています。

この写真は、隣島の阿嘉小学校の子どもと合同で指導しました。阿嘉小学校の3年生は一人ということで一緒に行っています。というような感じでシカの調べ学習を行っています。

取り組みへのとまどいと不安 慶留間小学校では総合の時間に地域のことを理解しようということで、3、4年生はケラマジカを調べようと設定されています。

総合学習の中でですね、ぼくはもともと沖縄本島で総合をやっていたんですけど、正直ちょっと授業の展開が難しいなということで、そこで慶留間で本格的にやってみようと言われて、「ちょっとヤバイな」と思いました。その時の不安ととまどいです。

まず、何をどうやって調べていいかわからない。ケラマジカについて調べるということだけど、いろいろとこれまでにやってきているのに、何を調べたらいいのかどうやって調べたらいいのかわからない部分がありました。

2つ目。授業の進め方、ぼくの勉強不足もあるんですけど、来てみたらとくに連携もあいまいですし、どうやって進めていけばいいのだろうと不安だったです。

3つ目。児童への課題の見せ方。これまでやってきているので、何を調べさせたらいいのか。前にやった人たちとかぶっていいのかなという不安もありました。

4つ目。調べ方、まとめ方ですね。実際シカ探

検に行ったんですけど、どうやって調べさせればいいのかまとめればいいのか。

5つ目ですね。遠藤先生です。大学の学生さんたちは遠藤先生の授業を受けるのをなんとも思わないかもしれませんが、学校現場に大学の先生が入ってくるのは、こちら側としてはドキドキするんですよ。遠藤先生が一番プレッシャーでした。いまはいい先生ということが分かっているので。

それから個人的な意見として、長期の探検活動。沖縄の陽ざしは殺傷能力がありましてほんとに暑いんです。ぼくもほんとに色白なんですけど、真っ黒になっていてですね。子どもたちは外に出るのを楽しみにしてるんですけど、雨が降ってこないかなあと考えている時もいまだにあります。

このように不安や戸惑いばかりでした。

子どもをその気にさせる教師の役割 ではどうやって取り組んだかということ、やはり外の学習活動の時間をたくさんつくりました。どうしても課題を見つけるためには、外に出て見つけさせるのが大切かなと思ったんです。でもなかなか課題は見つからないまま帰ってきたり、収穫がなかったりすることが多かったです。でもメモをしっかり書かせました。なるべくたくさん書かせるんですね。何も発見がなくても、何も収穫がなくても、とりあえず今日行ったことを書いてごらんと書かせていったら、何かしら疑問点がほんのり、不思議に思うことが書いてあるんですね。そこを見つけて、キーワードになる言葉を教師が見つけて子どもたちに気づかせる。それを課題を持たせるような形にしていきました。

例えば春華さんは、糞が見つかりましたと書いているから、これを調べさせたらいいんじゃないかなあとぼくが考えて、でも本人には糞のことを調べなさいとはひと言も言わないで、誘導尋問というか、うまくここに目が行くような形にしていきました。自分で課題を見つけた気にさせるということが大切なあと感じました。

いろいろ疑問を持っている中で、本当に自分で調べさせることができるものを焦点化することが大事だと思います。やっぱりファイルですね、これにたくさん書かせたことを入れてですね、その

中から種を見つけないという作業をやりました。

遠藤先生はいつもそれを見守ってくれていてですね、それがたくさん書かせることによって最後の研究発表につながったのではないかと思います。

課題が見つかったのが7月ぐらいでした。4月からずっと探検に出て、課題が見つかったのが7月。少し遅いかなあと思ったんですけど、何とか課題が見つかったの、そこから「よーし、これでいこう」というふうに持っていきました。

まとめさせ方ですね。これはまず、いろいろ調べた中で、自分の考えで自分の字で、裏紙なんですけど、これに鉛筆で書く。こうやって鉛筆で書かせました。そんなに難しく考えなくてですね、子どもたちはいろいろ自分たちでやるものだから、中身はどうだろうというものもあるんですけど、楽しそうにどんどんまとめていくんですよ。それをパソコンでまとめようということで、取り組んだんですけど。まず3年生の男の子は文字入力をあまりやったことがないんですね。だから時間が遅い。2時間かけてできたものがこれです。少しずつやって3回目で1ページになっています。だんだんスピードが速くなってきて、楽しみながらやっていました。覚えるのが早いですね。

これにワードアートの仕方や写真の入れ方。写真の入れ方は教えてませんね。ワードアートを教えていたら、自分で考えていろいろデザインしています。空白のところがあるんですけど、ここに写真を貼っていくというのを自分で考えて作っています。

4年生の女の子は、文字入力はできていたの、まずは文字だけ。たくさん打ってますね。2回目にワードアートと写真の入れ方を教えると、どんどん入れて楽しそうでした。いろんなことをどんどん入れるんですね。3回目で「もうこんなできた」と教えるんですよ。まあ、なんとか形にはできてるんですよ。遠くから見るときは。でも中身が問題。まとめたことが一切書かれていない。ちんぷんかんぷんなのを作っていました。で、最後の写真と絵は、この写真をインターネットか何かで調べて、これを貼りたいがために、最後に貼る写真を全部カットして、芝生の写真とこれを

くっつけて、今までやってきたことを全部無視して、最後には、「鹿は首を曲げて食べることが分かりました」とまとめていて、ほくもこのときはびっくりしたんですけど。

そこから2人とも軌道修正タイムですね。この辺はもう教師が、まとめ方は難しいので、教師が手助けしていいのかなと思います。できるだけこの子たちが調べたことを発表させたかったので、ここはほくの考えで、こうやってまとめていこうというものに、子どもたちがうまく自分たちで作ったような形でまとめさせていくというようなことをしました。ここは教師側が意図してやっていてもいいと思います。完成したものに本人たちはとっても納得していたので、自分たちで作った気になっているんだなあと思いました。

様々な授業につながる効果 この授業には様々な波及効果があります。いろんな面でいいことがありました。まず1つ目は自分で調べる習慣。どんな授業でも自分で進んで調べる光景がよく見られます。例えば国語の時間に分からない言葉があったら辞典を借りに行き、そこでぱっと調べる。辞典で調べたり図鑑で調べたりする。

2つ目は、社会の授業ではインターネットの画像でも百聞は一見にしかず、見たらパッと分かる、自分で使えるような空間にしてあります。このへんはちょっとよしとしている部分があります。

3つ目に自分の考えを提案する授業ができる。これは算数の授業でも行っているんですが、総合の時間でも使えるようになりました。算数のおもしろい発想とかあったら、必ず発表させる、しゃべらせる。相手に気づかせるような表現の仕方を、本人たちはがんばっています。

4つ目に観察力。普段の生活からいろんな興味を見つける。たくさん見る力が育ってきていると思います。前回沖縄に台風が来ていたんですが、その時ブーゲンビリアの葉っぱが全部飛ばされて、このブーゲンビリアはもうだめかなと思ったんですが、逆に新しい葉っぱが生えてきて、とっても元気になってるというのを、子どもたちから気づかされた場面があります。

5つ目に、島のよさが分かります。外に活動に

行くことで、鳥の特徴が分かって、地域の人たちに会うこと、あいさつをすると、地域の人たちが見守っているよという安心感があるんじゃないかなと思います。子どもたちは船でよく那覇に行ったり本島に行ったりすることがありますので、比較客観的に鳥を見ている部分があって、それを踏まえて、慶留間島が好きと、鳥が大好きだよと、子どもたちが堂々と口にしていく場面がよくあります。

6つ目に、何でもメモを取っています。子どもたちが好きそうな小さなメモブックがあるんですけど、これに気づいたこととかひょっと感じたことをメモするクセがついている。1つ困っているのは、会った人の話はメモしないんですね。でもいろんな場面でメモすることが、教師から言われなくてもできてることがよくあります。

7つ目は、目標設定ということで、常に今日はこんなことをしようと考えています。口だけではなく、朝の会で今日はこんなことをがんばりたいですと言うんですけど、実際に子どもたちを見たら、その行動を心がけている場面が常に見られます。一日毎時間、それから放課後陸上の時間というのがありますが、そういうのも目標設定、今日は何をするというのを決めて動いているので、大人でも感心することがよく見られます。

普段の取り組みが実を結んだ学会発表 学会の発表会では、私の目から見てもとても堂々と発表しているのはよかったですけど、やはり発表する場、場数が必要かなと思います。まず学校で取り組んでいることですね。音読朝会といいます。5、6年前から取り組んでいます。毎週火曜日の朝の15分間、発表者は毎週替わっていくんですね。聞いているほうも必ず一人ずつ感想を言うということで、しっかり聞かないと感想を言えないので、1年生から必死に聞いて、お兄ちゃん、お姉ちゃんたちがやったことを評価する場面も見られてですね、とても場慣れしているなあと感じます。これは私が来る前からそうでしたので、先輩の教師に聞いてみると、鳥の子たちはシャイで、大勢の前で話すのは苦手という子が多かったのだからこの場を設けて大勢の前でもしゃべれるようにしたいということがあって、それが伝統的に受け継

がれています。こういうことで、堂々と発表することができるようになったのかなあと感じました。

日頃の授業ですね。日頃から人数が少ないので、発表者にならないといけないというのがあって、授業の中でも必ず3回以上は発表させています。つぶやきとかも大勢の中では大事なんですけど、子どもたちがつぶやいたことを、もう一度ちゃんとした発表の形でやっごらんと、時間をかけて考えさせて発表させる形にしています。

儀式的行事でも作文を1枚書いて、一学期の反省、夏休みの計画、二学期の目標を書かせて、覚えて、舞台の上で発表するという場を設けています。だから終業式とかすぐ終わるかなと、来る前は思ったんですけど、1時間みっちりかけて発表させています。学習発表会。子どもたちは人数が少ないのでいつでも自分たちが主役ということで、落語の「寿限無」を2人でやったんですけど、演じきって話すことができました。「アドリブを使っていいですか」と、子どもたちがそういう言葉を使うのはすごいなと思いました。

地域行事ですね。地域の行事がたくさんありますので、その場でも発表したり、司会をすることが多いですね。いろんな場面で発表する場をたくさん設定しています。それで沖縄生物学会での発表も、これまでの成果が出たのかなあと感じました。

必要なのは教師の「心のゆとり」ということで、いきいきと語りだすにはいろいろな要素があると思うんですけど、総合の時間に要素があるとすれば、心の部分じゃないかなと思います。ゆとり教育とかそういう概念ではなくて、心のゆとりですね。調べ学習に行くときも、ゆったりとした感じで時間が流れています。ほくも最初慶留間に来たときは、そのゆったり感がなじめなくてですね、あれさせよう、これさせようと、空いた時間が来たら次へ進もうと焦ってばかりいたんですけど、同行した遠藤先生は、子どもたちと一緒にゆったりしているんですよ。あ、これか、遠藤スタイルは…楽しそうだなあとということで、そこから自分もゆったりしよう、ゆったりしようとなって、何かゆとりを持って調べ学習を進めることが

できたと思います。

子どもたちはこの調べ学習をしながら道草食ったり、ふざけながら、糞の匂いをかいだり、遠藤先生も子どもたちと一緒にのんびり調べ学習を行ったり、またゆっくり流れている時間に校長先生が業を煮やして「大丈夫かねえ」と言ってるんですけど、「先生、顕微鏡で糞をのぞいてみませんか」と校長先生を呼びに行ったり、そういうふうに、焦らずに、流れに任せたような授業を行っています。自分も楽しみながら、とりあえず「行くか」「何か発見できたらいいね」と言葉かけをしながら行っています。子どもたちは楽しみながら、自分たちが先頭に立って、ほくは後ろから、なんとというか、支えてあげるような形で、授業を進めていけばいいのかなあと思いました。

発見するまで待つ心。子どもたちが発見するまで、時間がかかるんですけど、それを待ってあげるのが一番難しいと思うんですけど、大事じゃないかなあと思いました。子どもたちは自分の考え、自分で発見した事を、自分の考えで語れますので、いきいき話せていたんじゃないかなあと思います。

ということで、参考になるかどうかは分かりませんが、今日はどうもありがとうございました。

磯部 きょうは、中村先生は標準語を勉強してきたとおっしゃっていましたが、いかがだったでしょうか。この後休憩に入りたいと思いますが、その前に確認のご質問などがあればお受けしたいと思います。

質問者1 自分は塾の講師で中学生を教えています。いま小学生のスローガンで「時間が大事」といって、ほくらは受験勉強を教えているので余裕がなくて大変なんです。この総合の時間というのは週何時間なんですか。

仲村 去年までは週に3回。

質問者1 1コマは45分、その中で外に行き帰ってくると。結構いまの時間的な話の中でいうと少ないような気がするんですが。

仲村 本当は分かれているんですが、1校時から4校時までまとめて使ったりしました。

質問者2 御池小学校の竹下と申しますが、2点

ほど質問です。まず外に出る時間は全体のどのくらい使われているのでしょうか。もう1つは、やはり総合の学習の時間は子どもたちがどれだけ興味を持って取り組んでいるかということ、それを維持することが大事だと思いますが、いまのお話では非常にいきいきと調べていてすばらしいと思います。その秘訣はどこにありますか。これまでも積み重ねで自ら調べたいという態度が出てくるのか、あるいは島の子たちがもともとそうなのか。そこを教えていただけたらと思います。

仲村 4月から週3回の総合時間、減ってきてるんですけど、この時間はほぼ活動に当てました。雨が降った場合も多かったんですが、雨のときはほかの授業に当てて、その分また時間を取りました。子どもたちがとても楽しみにしているのです。いつも見ているシカなんですけど、やっぱり外に出るうれしさがある。ほくのほうから、「きょうは国語にしようかな」と言うのと「えー、やだー」。もう子どもたちに外に出るのは楽しいよというのを植えつけてですね、ほくは外へ行くのは嫌なんですけど、逆に演じきりましたね。島の子自体、こういう関心はあったと思います。男の子は沖縄本島の子なんですけど、島の子と一緒に過ごすことによって、島の自然にとっても興味を持って一緒に調べていきましたね。

磯部 では質疑応答の時間に移らせていただきます。遠藤先生もこちらへどうぞ。

きょうは「小学校へき地校の挑戦」というサブタイトルでお送りしているんですけども、私自身は心理学が専門で、こういう仕事をしていると最近の子どもはコミュニケーション能力が低くなっているとか、学ぶ意欲というのがあまり見られないということの方々に聞かれています。そういったお話をしている中で日頃、遠藤先生が「島の子どもを見てごらんよ、イキイキしてるから」とおっしゃるので一緒に行ってみたら、本当にいまお話にあったとおりになんですけれども、本当にいきいきとしている。自分の言葉で考えていることを発表していました。いろいろな要素はあるんだと思うんですが、今回は自然を活かした教育をするという観点で、子どもたちがいきいきと語り

だしている秘訣というか秘密というのを探っていたらいいなという趣旨でこの会を開いています。ですので、すごく自然に恵まれたところのお話なんだろうなということではなくて、この話をヒントにして自分達の教育実践で何が活かしているかという視点でこの質疑応答を進められたらなあと思っています。

質問者3 野尻小学校の富永と申します。お二人に質問なのですが、総合の進め方について仲村先生のお話では子どもたちに課題を見つけさせるのが難しいということでしたが、きょうの発表はシカの生態についての調べ学習が中心なのかなと感じたんですが。このシカが天然記念物であることでこれを守るための取り組みについて、例えばエサを増やすとか、絶滅寸前であればそういったことも考えられるし、農作物の被害が大変ということであれば、そこら辺の考えも出てくるかと思うんですけど。小学校が取り組んでいるシカに関する調査研究と、民間や役場との兼ね合いというんですか、といったところでシカを守っていく。そして学校と地域社会の関係がどのように求められているのか。子どもたちにシカの生態を明らかにした上で、どんなふうにシカを守る取り組みをしているのか。あと地域社会との関わりとか、そういったところのお話とか聞きたいなあと思いました。

磯部 総合的な学習の時間の中でのシカの研究とシカの保護との関係ですね。その地域との関係が何か。

遠藤 じつはケラマジカ研究を学校で始めたのは保護の目的が最初にあって、ケラマジカは畑を荒らす害獣という意識が地域ではすごくあって、その中で子どもたちは育っていくものですから、まあ普通にケラマジカは害獣という意識で育っていくんですけど。ただ一方で天然記念物にもなっていて、生物学的にも非常に興味深いシカということで、村の教育委員会としては保護していきたい。その時に、結局は地域の人たちがこのシカをどうするかというのを考えていってほしいと。研究者の外圧とかで、これは珍しいシカだから守りなさいというふうに、そこに住んでいる人を飛び越して守りなさいということとはできないだろう。

地域の人たちが考える。その時に学校教育の中でシカのことを取り扱っていて、まずシカのことを知ろうじゃないかということがスタートなんです。

そうやっていますと、今度は地域の人たちから、害獣なんだから駆除しろとか、どこかへ持っていけという話しか聞かなかったんですけど、子どもたちが調べている大事なシカだから守ってほしいんじゃないかという声が出てくるんですね。保護と言ったときに必ずしもシカにどんどんエサをあげて守ってあげるということではなくて、そこに住んでいる人とシカの関係がどう適切なものであるかというところが大事だろうと。もちろん人は住んでいるわけですから、畑を荒らされても我慢しなさいという話ではなくて、どういう知恵を使えば人とシカの折り合いが付けられるかと。そこを地域の人たちに考えてほしいというのがこの研究のスタートなんです。しかしそれをやっている中で、いろんな学校教育につながるようなことが見えてきたというのがきょうのお話なんです。

磯部 仲村先生のほうから、子どもたちがシカを守る意識なりシカをどう思うかの変化とかあれば。

仲村 シカを守るとかシカの保護のこととかですね、正直ほくは手一杯で、そこまで考えられていません。子どもたちもそういう意識があるかなと思ったら、そういうことはないかな。いまこれやっているのが楽しくて、シカをどうしよう、こうしようというのは、ほくのほうも指導しきれないんですけど、子どもたちはこのことではいっばいだったんじゃないかなと思っています。この先いろいろ、だから保護しなきゃいけないよとか色々教えていけたらいいかなと思います。なので、いっばいいいばいでした。

遠藤 補足と言いますか、5、6年生の総合学習で地域の自然保全ということが出てきて、その中で森林を使って薪を使っていろいろなことをやろうというのをやっている。これは先程出てきた、子どもが突撃インタビューをした時に、森に手を入れていた時代があった事を子どもたちは知ったんです。それをしていたのは誰かということ、慶良

間では昔から慶良間節という鰹節を大々的に作っていて、漁師が里山管理をやっていたという歴史があるわけなんですよ。今は誰も作っていないのでこれを5、6年生の総合学習の中で再現しようというのをやりました。これは本当に地域の協力がなくてできないんですけど、地域の方が鰹節を作るなら鰹から釣らないとダメだと言い張って、船を出すからと言って子どもたちを船に乗らせて、1時間ほど乗って、見事にこれぐらいの鰹を釣って帰ってきた。それを捌いて燻製にすることをやっていく。小学校全体の中で、3、4年生はケラマジカのことをやるんだけど、それは5、6年生で発展させて生態系の中での位置付け、そういうのを今からやろうとして今まさに取り組んでいるところです。

磯部 もう1つか2つ、ご質問があればお願いします。

質問者4 私は鹿児島島の私立の高校で教員をやっている岩崎といいます。

仲村先生のお話の中で、生きる力ということで紹介がありましたが、ひとつ疑問がありまして質問させていただきます。仲村先生はずっとこの小学校にいたわけではなく転勤なさるわけで、遠藤先生の言うように人材育成も大事でしょうし、また子どもたちの生きる力の育成の面でも大事だと思うんですけども、そのあとですね。仲村先生がいなくなって、校長先生が代わられた後もカリキュラムの中に入っているということは、引き継ぎが必要だと思うんですが、それはどのようになされるのか。また遠藤先生がこのまま沖縄の島に関わっていくのか、それは地元の人たちだけでやれるようにしていくのか。そういうことをお聞きしたいんですが。

仲村 じつはぼくが来たときに、前の3年生の先生が教員をするのが初めてで、もともとは中学の社会の先生で、臨時の先生だったんですね。そういうことで引き継ぎがなかったんです。連携もあいまいでしたので、ほかの先生から教えてもらいました。地域の方と結婚した先生がたまたまこの学校に残ってたんですね。その先生はずっと慶留間小学校にいる先輩で、その先輩からずっと教えてもらっていたんですけど、今回は、あまりやり

すぎてもいけないんですけど、こんなときはこれをしたほうがいいよという連携をしっかりとやって、いま話したようなことを新しく来た先生に伝えていけたらいいと思います。それでもやっぱり糞のことを調べるわけにもいかないの、そこは次の先生に、遠藤先生にお任せして、育ててほしいと思います。ぼくのほうも本島に戻ったらいまやっていることが通じるかどうか、30名近くの子どもたちに対してやってうまくいくかどうかということが不安です。でも何かできるようなことから始めていきたいなと思っています。

遠藤 こういう形を作って学校の中で完結していくのが理想ではあるんですけど、でもまだ沖縄に通いたいので、「求めてほしい」。

質問者5 私は子育て支援の立場でこの講演を聞かせていただいたんですけど、日本の子ども政策に欠けているポイントがすべて凝縮されているなと思いました。さらに教育の原型じゃないかなと思いました。その一つは、「なぜ」というふうに関心かけてその答えを待てる時間があるということが重要だと思いました。それを自然に遠藤先生は自分の研究でやっておられるんですけども、本当はこれはすごく大事で子どもにとって必要なことで、教育政策に必要な視点だと思います。先生が自然に向かわれて研究をされていることが、じっと待つということが根底にあるのではないかなと思いました。

あと一つですね、長期的なというお話が出たんですけど、これは中学校との連携をどのようにやっているのかと、こういう体験をした子どもたちがいったん外に出ても、やはり島のよさが分かると先生も言われたんですが、また地域に戻ってくるきっかけになる。またいろんな問題を起こして生きる力を失ったとしても、こういう経験があればまた生きる力を取り戻して元気になることができる、もしかしてきっかけになるんじゃないかなということを感じました。その意味で、環境学習について子どもの育ちを含めた長期評価ができればいいなと思いました。

磯部 3、4年生でこういう教育を受けた子どもたちがその後どういう道を歩んでいるのかという

ことがあればお願いします。

仲村 環境教育について3、4年生でシカの生態についてやっているんですが、中学校も併設されてるんですけど、じつは中学校からの総合は、福祉とかそういうほうに持っていつているようで、あまりつながりがないんですよね。この辺はぼくなんかも中学校の先生とお話ししてつなげていけたらいいなと思います。ただここで身につけた総合が中学校でも生かされている場面も聞くことがありますので、うまく調整して自然保護も中学校にお願いしたいなと思います。阿嘉小は中学校と一緒に連携してやっているの、そこを見習ってやっていけたらいいなと思います。

遠藤 教育の連携ではないんですが、こういう経験をした子どもたち。一昨年、発表した子は6年生になったとき夏休みの自由研究で、こっそり自分で植物の構造をよく調べていて、それをまとめて、じつは同じときに学会で発表しています。その子は（シカのことを）学会で発表したときに琉大の植物の先生の発表を聞いて、一つの植物のことをずっと詳しく調べることの意味を強く感じたようです。すごくおとなしい子が積極的な子ではなかったんですけど、いつの間にか琉大の先生と名刺交換していて、知らない間に文通とかもしていて。それで今回中学生になったときに、6年のときに調べたことの発表をした。それはセンダングサ。種がこういうところ（ズボンの裾）にいっぱい付くんですけど、それがどうやって付くかという仕組みを解明するという自分で実験して、その発想がすごくおもしろいとその先生からコメントをもらったりしています。もう一つおもしろかったのは、動物にくっついて運ばれてどこかに落ちるんですけど、落ちる仕組みを調べたいというような発想でしたよね。その発想というのはなかなかないなということで、新たな発想が出てきている。これは個人の興味によるんですけど。ちなみに最初にシカの研究を始めた少年はサッカーに没頭しています。

磯部 ありがとうございます。ここでいったん切らせていただきたいんですけど、最後にひと言ずつ。

遠藤 きょうは自然を使った教育ということだっ

たんですけれど、最初に申しましたようにたまたま自然を手段に使っているという話で、本質は子どもたちにいろんなことを見つけ、考えさせ、表現させるということ、何を使ってやるかということで、一例として自然を使った教育ということで紹介させていただきました。自然教育とか自然体験というのは子どもたちの年齢によってくるんですが、小学校4年生あたりからすごくいろんなことを思いついて、いろんなことを表現できる年代じゃないかと思っています。この時期にこういう学習するというのはとても大事なことだと思いますし、もちろんこれを全教科でやるというのではなくて、せっかくある総合学習ですから、いま時間はどんどん減ってきてはいるんですけども、有効に使うことができるんじゃないかと思っています。そのための知恵を、みんなで出していったほうがいいのかと思います。

仲村 きょうは遠藤先生に呼ばれてここまで発表させてもらったんですけど、対象が学生ぐらいの年齢かなと思って言葉もあまり考えないで、当日になってから、先輩方もたくさんいらっしゃいますので、ビビりました。ということで舌足らずなところがいっぱいあったと思うんですけど、標準語でしゃべろうと思ったんですけど、それどころではありませんでした。伝わったかなあということと、まだ言い足りなかったこともあるような気がします。参考になればと偉そうに言ったんですが、まだ試行錯誤中です。皆さん一緒にがんばりましょう。

磯部 一つ心に残っているエピソードがあって、去年の沖縄生物学会でしたが、子どもたちが発表したあとに、専門家のほうから「シカは好きですか」という質問があったんですね。それに対して子どもたちが「好きかどうかは分からないけれど、もっと知りたい」と答えたんです。その知りたいという気持ちが愛する気持ちにつながって、守りたいという気持ちにつながると思うので、逆にそのドキドキの気持ちを引き出す、知りたいという気持ちを摘まない、ということが大事ななこと、ということをその時に感じました。

きょうは足下の悪い中こんなに大勢来てくださって、一同喜ばしく思っております。どうもあ

りがとうございました。

「子どもがいきいきと語り出す授業」会場アンケートの回答

来場者： 47名 アンケート回答者：27名

1. あなたのご職業は？

保育士	2名
小学校教諭	8名
中・高等学校教諭	1名
大学教員	4名
教員以外の公務員	1名
会社員	1名
その他	10名

2. 今回の講演会をどのように知りましたか？

案内チラシ	5名
南九大HP	0名
センターブログ	1名
知人等から	15名
その他	6名

3. 講演会についての感想

- ・ゆったりとした雰囲気の中での講演会で参加できました。総合学習のねらいがまさに本日の実践に込められていたと思います（小学校教諭）
- ・一つのこと「疑問」を持つ事が大事だと思います。そしてその疑問を口にして、発表する場、議論する場が必要だと感じます。子どもだけではなく、大人社会にも非常に必要なことだと感じました。現場に必ず答えはあると信じています（市議）
- ・現場の教員のナマの感想が聞けてとても参考になった。総合的な学習の時間の多くが自習やLHRに充てられている高校でも、いい参考になる事例だった（高校教諭）
- ・待つ大切さを改めて感じた。忍耐強く（大学教員）
- ・何もわからず参加させてもらいましたが、自分の知らない教育の方がたくさん行われていて、とても未来のある事だなとうれしく思いました。楽しい時間をありがとうございました（医

療関係)

- ・子どもたちのいきいきした様子が伝わるほどでした。大変興味深い内容でした（大学教員）
- ・説明がていねいでわかりやすかった（鹿の話）、あくまでもあなた（生徒）が主役という教え方は高く評価されます（仲村先生）（元私立高校教師、元私立幼稚園事務長）
- ・前回に続き、また参加させていただきました。とても面白かったです。ありがとうございました。またこのような講演会があれば参加したいです（保育士）
- ・総合的な学習の進め方がわかり、有意義な時間でした（小学校教諭）
- ・総合学習という授業。この都城の小学校ではどこまで行われているのか？どこまでできるのか？すごく気になりました。子どもたちにとっては授業として…だけでなく、それが遊びとして行われていくように工夫できないか？と考えさせられました。大きな学校ではなかなか難しいですね（保育士）
- ・総合学習の時間が削られている流れの中で、これだけの実践が行われているのはとても興味深いです。都市部の学校ではおそらく不可能だと思います。自然に恵まれ、良い教師に出会ったケラマ小の子ども達がうらやましいですね（退職者、エコの会）
- ・教員でない私には少し場違いのようでもあったが、総合学習という意味では役立つ部分もあった（会社員）
- ・ありがとうございました。これからも学校とのかかわりをよろしくお願いします（小学校教諭）
- ・日常の中に「知の探検」を求めて、地域からローカルから、なぜ？を発信し、普遍化する取り組みに共感しました。
- ・誰でも参加できる雰囲気がとてもいい（子育て支援）
- ・時間も適当で、お茶を飲みながら、リラックスして学ぶことができました（市議）
- ・教育には「間（時間の余裕）」が必要だということを改めて感じました。勉強になりました（塾講師）
- ・技術系の仕事をしており、子どもの教育とは直

接かわりはないが、後輩の教育また、自分自身の成長に役に立つ非常に有意義な講演でした。来てよかったです（会社員）

- ・すばらしい環境の中で問題解決的な学習が展開されており、うらやましくも感じた（小学校教諭）
- ・今日の講演を聞き、自分の授業にも活かしていきたいと思いました。ありがとうございました（小学校教諭）
- ・小・中学校の統廃合が進んでいますが、へき地校には「効率」ではなく「効果」を求めべきなのかなと考えたところです（公務員）
- ・今日はありがとうございました。「プロセス重視」とシカの研究はその手段であるということを実践を通して話して頂いて、とてもわかりやすく、興味深く聞かせていただきました。次の会も楽しみにしています。ありがとうございました（大学教員）
- ・アットホームな雰囲気楽しくお話を聞くことができました。たくさんの方の意見、考えも聞けてよかったです（主婦）
- ・「総合的な学習の時間は現場では見放されつつある」と認識していました。しかし、本日の講演で原点に戻っての実践の積み上げが今こそ必要だと考えが変わりました（小学校教諭）
- ・スケールの大きな学習だと思えるが、子ども達はたのしくゆったりした時間の中で進んでいることに感動した。「見つけ、考えさせ、解決し、表現する」「環境は一つの手段である」…遠藤先生のお考えが伝わる言葉でした。ありがとうございました（小学校教諭）

4. 今後の講演会において希望するテーマ

- ・大学の先生との理論研究が学校現場でどう実践されているか。その事例を紹介する場を作ってほしい（小学校教諭）
- ・他の現場の総合学習の事例（高校教諭）
- ・今まではデンマーク、沖縄なので、今度は都城周辺の事例で!!（大学教員）
- ・デンマークなど北欧の教育・福祉・医療に興味があります（医療関係）
- ・障害児に関するテーマの講演を希望します。自

閉症、不登校児、引きこもり、DVなど（元私立高校教師、元私立幼稚園事務長）

- ・自然、保育、農業にかかわる実践、活動が教えてもらえる講演会（保育士）
- ・同じテーマで（小学校教諭）
- ・子どもの周りの環境構成について。他県の取り組みなどをもっと知りたいです（保育士）
- ・環境にかかわる実践を中心に据えて、子ども達が生き生きと取り組んでいるテーマの話を読みたいですね。子どもたちにとって、この短い期間の体験はとても大切だと思います。ダイヤモンドの原石だと思います（退職者、エコの会）
- ・次回の教育シンポジウムを是非聞きたい（子育て支援）
- ・教育全般（市議）
- ・中等教育における「環境教育」「自主性の育成」などの方法。具体的な事例などについて学びたい（塾講師）
- ・児童心理について再度(大学のとき学習したが)講義を受けたい（小学校教諭）
- ・ジオパークのなかで活かされる教育について勉強がしたいと思いました（主婦）

